

井上靖「西域物」における異域の人々

—『敦煌』の登場人物をめぐって—

劉 東 波

I、はじめに

井上靖の長編歴史小説『敦煌』は、昭和三十四年（一九五九）一月号より五月号まで、『群像』に連載された。この『敦煌』は、シルクロードの壮大な歴史ロマンをたたえて日本中を魅了した。その後、「楼蘭」とともに毎日芸術賞を受賞した。井上は「『楼蘭』は「歴史そのまま」の作品であり、「敦煌」はある意味で「歴史離れ」の作品である。「蒼き狼」はそれらの中間にある作品である。」と述べている¹。『敦煌』の登場人物には、李元昊のような歴史上の実在の人物もいるが、主要登場人物はすべて虚構である。井上が述べた「ある意味で「歴史離れ」とは、自分の想像で歴史の空白を埋めることもあるし、作品に一貫性を持たせるため歴史を改変することもあるということだろう。

井上靖は『敦煌』を創作した際、大量の文献、及び当時の最新の研究論文などに目を通したということが分かっている。しかし、「どうやって」、「どうして」、「いつ」、「誰によって」、敦煌文書が蔵経洞に隠されたのか、その歴史的な経緯は、井上が調べた史料には書かれていない。『敦煌』では、「蔵経洞」が包蔵される一日、及びその経緯を小説の形で語っている。

本作品の主人公・趙行徳は、敦煌文書を守るという歴史的大事業を完成した人物と設定されている。脇役の朱王礼、尉遲光も個性を持つ人物として描かれている。本稿では、登場人物の人物像の分析を通して、各人物が小説で果たしている役割を究明したい。

本作品における趙行徳、朱王礼、尉遲光など虚構の登場人物に関しては、多くの謎が残っている。今までの『敦煌』に関する先行研究を挙げれば、まず譚瑋氏は『敦煌』における中国像に焦点を当て、趙行徳の文人像、朱王礼の軍人像、尉遲光の商人像について分析した²。高木伸幸氏は「学問好き」という側面から、趙行徳の人物像を分析した³。また、鈴木正志氏は、趙行徳に足立文太郎と荒井寛方のイメージが投影されていると論じている⁴。しかし、趙行徳のモデル、趙行徳の儒生から軍人、軍人から仏教徒への転換などに関して、まだ研究の余地があると考えられる。以上の点を踏まえ、本稿では、『敦煌』における主要登場人物の人物像を中心に考察を行う。

Ⅱ、趙行徳の人物像

1. 落第者の儒生・趙行徳

以下では、趙行徳の人物像について、儒生、軍人、仏教徒の三段階に分けて分析する。大宋国潭州府の挙人趙行徳は、科挙の進士試験を受けるために、仁宗の天聖四年（一〇二六）の春に、都の開封へ上って来た。趙行徳の三十二歳の頃であった。唐の時代から、科挙試験の受験生の年齢に関して、「三十歳の明経は老い、五十歳の進士は少い^{わか}」という説が流布していた。宋の時代に科挙の「明経科」は廃止されたが三十二歳の趙行徳にとって、間違いなく進士試験に合格するのは難しいことである。では、儒生の趙行徳は、どのような受験生として描かれているのだろうか。

趙行徳は受験者の中に、自分より優れた学力を身につけたものが何人もあろうとは思わなかった。（中略）儒者の家に生まれ、幼時から学問に親しみ、三十二歳のこの年で、書物を身邊から離れた日はないと言ってよかった。これまでの何回かの試験は、いずれも行徳にとっては容易なものであった。その度に何百何千の競争者が篩にかけられ、次々に脱落して行ったが、行徳としてはかりそめにも自分が試験を受けて、落伍者の群れにはいるなどということは想像できないことであった⁵。

趙は幼い頃から一生懸命に勉強し、進士試験の受験資格を取った。都における殿試の前に、礼部の帖経、雑文、時務策などの試験をいずれも優秀な成績で通過した。また、吏部の身、言、書、判の試験も順調に通過した。最後の殿試で、優秀な成績で合格すれば、宰相をはじめいかなる高官を望むとも可能になる。

趙は優秀な成績で殿試に入った。受験生三万三千八百人のうち五百人が選ばれることになる。競争が厳しいとはいえ年若い彼にとって、合格する可能性も高い。しかし、殿試の当日、趙は居眠りのため、落第した。譚瑋氏は趙の落第の原因について、次のように述べている⁶。

趙行徳が疲労で夢に入ることは幻で偶然的であるが、朝廷の政策に反対して罷免されることは現実で必然的である。

趙は「四書五経」などを熟知しており、儒生として欠点はない。ところが、もし彼が官吏になっても、相変わらず良い「成績」を取れるとは限らない。試験中の夢での、「何亮の安辺策」に対する態度は、主流の国策と合わないからである。趙が生きていた仁宗の時代、「重文軽武」は政府の基本政策で朝廷の主流派はできるだけ戦争を避けようとしていた。それに対して、夢で何亮の主張を支持した趙は、朝廷の非主流となる。

西夏の女から西夏文字で書いた布片をもらった後、趙は礼部の長官を訪ねた。趙は夢と同

じように、「何亮の安辺策」に賛成し、西夏がいつか大患になることを現実でも長官に告げた。しかし、まるで夢と同じように、長官は趙が言ったことに関心を持たず、帰るよう促した。

夢でも、現実でも、趙行徳が官吏になれないことは必然であると思われる。この点に関しては、試験の落第と長官との面会を通して、趙行徳自身もよく分かっていたはずである。そのため、また試験があるとしても、受験する意欲がない。彼は自分の未来に非常に迷っていた。これは西域へ旅を立つ伏線の一つである。

落第者の儒生の段階で、伝統的な科挙試験を受ける士子のイメージが趙に投影されている。唐の時代に入り、中国の官吏任用制度は一新された。一般家庭出身の男子は、科挙試験を受ける以外、自分の運命を変える道がない⁷。そのため、多くの人々は趙のように、儒家の經典の知識を身につけ、科挙試験に参加する。その時代の儒生の様子は、落第する前の趙行徳に投影されている。

また、趙行徳の落第に関して、多くの研究者はこれが井上靖自身の経歴と重なっていると論じている。福田宏年氏は次の通り述べている⁸。

受験の失敗といえば、井上靖は、ちゃんと入ったのは小学校だけで、あとは、中学、高校、大学と、すべて見事というほかない迂回ぶりである。昭和十一年に京都帝大を卒業したときは、数え年三十歳で、普通より五年の廻り道をした勘定になる。(中略)『敦煌』の趙行徳は、進士の試験を受けるために都にのぼったが、うっかりうたたねをしてしまつて機会を逸してしまう。あの趙行徳は、実は井上靖の姿なのだということが想像される。

井上靖が経験した受験の失敗は、一度だけではなく、何度も落第している。受験の失敗により、相当な打撃を受けた後の気持ちは、井上自身がよく分かっているはずである。趙行徳は失敗した後、「魂のない人間のように」街を歩く。その趙の気持ちに、どれほどの絶望があるのだろうか。井上靖は自分の抱いた気持ちを全て趙行徳に書き込めた。

ところが、西夏が国の大患になることを予言し、何亮の「安辺策」を提唱すること、西域という未知の世界に憧れを持つこと、及び好奇心により西域へ旅立つ勇氣など、これらは井上靖が趙行徳に授けた独立、あるいは特別の性格である。このような特別な儒生であるからこそ、趙行徳は、「敦煌文書」を守る人として設定されている。

2. 西夏国の軍人・趙行徳

趙行徳の儒生から軍人への転換は、偶然である。趙は西域へ行くが、最終の目的地は、おそらく彼自身にも分からない。趙は科挙の落第により打撃を受け、一方で城外の市場で出会った西夏の女からは刺激を受け、西域に行くことを決めた。しかし、彼は靈州を経て、涼州へ行く途中で、涼州を攻略した西夏軍の兵隊に拉致された。

趙が所属した部隊は、漢人ばかりで編成された西夏軍の第一線部隊である。趙と戦闘部隊との出会いも、兵隊に拉致されたことも、偶然である。しかし、趙は軍隊に編入された後、多くの合戦に参加し、戦場で必死に戦っている。

では、なぜ趙は軍隊で反抗しなかったのか。科挙試験に落第した儒生の趙から、合戦に参加し、負傷して帰った兵卒の趙への転換は不自然ではないだろうか。

趙行徳が自分の命を危険にさらす原因について、劉鋒晋氏は「儒家の思想、『力行は仁に近く、恥を知るは勇に近し』から影響を受けた。」と論じている⁹。しかし、筆者はそうではないと考えている。

行徳は毎日のように城外で戦闘の訓練を受けた。体格は貧弱であり、生まれつき非力であったが、行徳は真剣に訓練を受けた。(中略) 趙行徳の兵卒としての役目は馬の鞍に旋風礮を備えつけ、それに依って石をはじき出しながら敵陣に向かってまっしぐらに駆けつけ、敵陣を縦断して行くことであった。趙行徳は馬上で武器を振り廻す力は持っていなかったが、旋風礮を操作することは非力でもできたし、体格が貧しく、体重が軽いことは寧ろ潑喜徒(射手)としては適していた。

以上の内容から、趙が拉致された後の態度は、抵抗ではなく、「真剣に訓練を受けた」ということが分かる。したがって、趙の態度は不自然ではない。理由として以下の二点が挙げられる。

- ・西夏軍に参加することは西域に来た目的と一致する。
- ・西夏軍が攻略したのは、回鶻族など西域の少数民族集落であり、母国の宋ではない。

趙が兵卒になったのは予定外のことである。つまり、西夏軍の一員として生活するのは趙にとって、やむを得ないことである。真剣に訓練を受けるのは、彼の無力のためでもあるが、戦場でまず自分を守ることこそが生き残るために重要だからである。したがって、兵卒の趙を支えたのは、儒家の思想などではなく、一人の人間として戦争で生き残るための思いである。

また、趙がうまく軍人として適応できた理由は、以下のように考えられる。

- ・積極的に訓練を受け、参戦経験が豊富になった。
- ・軍隊での役目は端役であり、危険性は高くない。
- ・朱王礼は文字を読める趙を重用し、保護した。
- ・西夏の都で西夏文字の学習が終わった後、地位が変わった。

趙の生涯で、軍人時代は彼にとって非常に大事な時期である。戦争に巻き込まれたことも、朱王礼や回鶻王族の娘との出会いも、西夏の都での西夏文字の学習も、すべて貴重な経験であった。この経験のおかげで、趙は儒生から軍人に転身できた。

儒生の段階の趙は、複雑な西域の状況に対して自分なりの見解を持っていた。落第の後、西域に関する好奇心を持つようになった。また、軍人になった趙は、西域の状況を把握して、西夏の文化と文字も習得した。軍人の段階の趙は、守るべきものを守れる能力を身につけた。

筆者が調べたところ、軍人の趙行徳のモデルと思われる、「張元、呉昊」の話は、多くの史料で確認できる。

嚴有禧「殿試」（『漱華隨筆』）¹⁰

【原文】

舊制、殿試皆有黜落、臨時請旨、不拘數目、故有省試屢經中式而見擯於殿試者。宋時、張元以落第進士、積忿降元昊。爲中國患。於是群臣建議、乃詔進士與殿試者皆不黜、沿至本朝、殿試舉人間有黜者、不爲常典。

【書き下し】

宋の時、張元進士に落第するを以て、忿を積りて元昊に降り、中國の患ひと爲り。

【現代語訳】

宋の時代に、張元は進士試験（殿試を指す）に落ちて、怒りを抑えられなく李元昊に降伏した。（後に）中国の患（心配事）になった。

以上の話は、『宋史』（陳希亮列伝第五十七）や『容齋三筆』（第十一卷）などの資料にも見られる。井上靖は本作品を創作した時に参照した資料について、以下の通り述べている¹¹。

それから当時の西域への入口である河西一帯の辺境の歴史がよく判らない。宋史に依って、こうした部分を拾っていくほかないが、一〇二六年からあと十年程の一番重要な部分は、どの史書に於いてもブランクになっている。このブランクを小説に依って埋めることになったわけである。宋史も亦図書館から借出していたが、その後中国の商務印書館から縮刷の複写本四冊が刊行されたので、それを使った。（後略）

張元は実在の人物である。宋国で何回も科挙試験に参加したが、いつも殿試で失敗している。そのため、友人の呉昊と共に西夏へ行き、彼らは李元昊に重用され、高官になった。特に、張元は李元昊の軍師などを歴任し、西夏の国相になった人物である。

趙行徳は、張元のように、科挙に落第し、母国を離れて西域に入った。趙行徳が西夏の軍隊で重用されたことと張元が西夏の軍隊で重用された経歴とは重なっている。そのため、西夏で活躍した漢人の張元は軍人の趙行徳のモデルの一つだと考えられる。

また、軍隊に編入された趙行徳に、井上靖が自身の経歴を投影していることもよく論じられている。

井上靖は昭和十二年（一九三七）七月七日の盧溝橋事件が始まって間もなくの頃、同年の九月に召集を受けた。大陸に送られて、第三師団の輜重隊に入隊した。ところが、井上は翌年の昭和十三年一月に脚気になり、応召四か月で内地送還となり、四月に除隊された。井上は自分が除隊されたことを「非常に幸運だったと言うほかない。」と語っている¹²。

趙行徳は井上靖と同じく強制的に軍隊に入れられた。戦場での、旋風砲の仕事も輜重隊の仕事も、さほど危険性は高くない仕事である。井上が脚気により除隊されたことに対し、趙は文字を読める才能を持っているため朱王礼に保護されていた。この点を考慮すれば、井上靖自身が趙行徳のモデルでもあったと考えられる。

3. 仏教徒の趙行徳

趙行徳の三つの段階のなかで、仏教徒の段階は最も重要である。軍人の趙は肅州で、初めて仏教に関心を持つようになる。それまで、彼は仏教に対して無関心であった。

（前略）行徳は城内の寺から、法華經の一巻を借り出し、それを読み終わると、次から次へと結局七巻全部を読み終えた。こうしたものを受け入れる心の地盤が、いつか行徳の心の中に生れていたのである。法華經を読み上げると、こんどは「金剛般若經」を読み始めたが、それがいかなる教を説くものであるかをさらに詳しく知るために、大智度論という金剛經の注釈書があることを教えられ、それを数巻ずつ借り出して読んだ。儒教の哲学とは全く異なった仏教の教理に、行徳は次第に烈しく惹かれて行った。行徳はまるで熱病にでもかかったように、大智度論百巻を次々に借り出して来ては、辺土の兵舎の片隅で読み耽った。

ここは、趙が初めて自主的に仏教に関する知識を勉強した場面である。趙はなぜ仏教に興味を持つことになったのだろうか。作品では「回鶻の王族の女の死は、こうした趙行徳にも一つの変化を与えていた。それは趙行徳が仏教というものに改めて心を惹かれ始めたことであった。」とある。趙が仏教に興味を持つようになったきっかけは回鶻王女の死である。さらに、砂漠での多くの兵士たちの死も趙に大きな影響を与えたと考えられる。

趙は肅州を離れ、瓜州に到着した後、太守の曹氏に仏典を西夏語に翻訳する仕事を頼まれた。この作業により、趙の仏典に関する認識はさらに深くなったと言える。趙の軍人から仏教徒への転換は、人々の死に対する考えを契機として、仏典の翻訳の作業に伴い進んだ。

長期にわたり、趙は仏教徒であり、軍人でもあった。趙が軍人から仏教徒へ転換する際には、二つの面が重なっている時期がある。

本作の第八章、仏教經典を莫高窟へ運ぶ時の趙の姿は完全な仏教徒である。宋土を離れて西域に入ってから以来、趙は多くの人が戦争により命を失ったことを目撃した。彼自身も幾度もの戦争を経て、何回も死の境を彷徨った。その時、仏教の「因果」や「輪廻転生」などの教えが趙を救った。さらに、經典を戦火から守るのは、漢人の趙の判断であり、仏教徒の趙の決意でもある。

仏教徒の趙行徳のモデルについて、井上靖は「私の自己形成史」で荒井寛方氏¹³のことに、以下のように述べている¹⁴。

（前略）明日の日はわからなくても、やはり模写しなければならない。本物も模写ともに消滅するにしても、模写の努力だけはしたという人物がなかったら、金堂の壁画は泣きますよ、と彼はそんなことをぼそぼそした口調で言った。私は荒井寛方画伯と最後に会ったその日に、心も体も引きしめるような感動を、今でもはっきりと思い出すことができる。

井上の話について、大里恭三郎氏は「井上氏はたぶん、この日の感動をあたためつけ、そしてあの『敦煌』の行徳の情熱の中に、無報酬で壁画の模写に没頭していた荒井画伯の姿を刻み込んだのであろう。」と論じている¹⁵。大里氏が論じたように、仏教徒の趙には画家荒井氏のイメージが託されているのではないだろうか。

井上靖は仏教に特別な感情を持っていた。昭和十三年四月、除隊された井上は毎日新聞社に復帰した。大阪本社で学芸部に配属され、上司の井上吉次郎に宗教欄の担当を任された。井上靖は、以下の通り述べている¹⁶。

（前略）鶴の一声であった。当時は井上吉次郎を恨めしく思ったが、宗教については何の関心も知識も持っていなかった私が、宗教関係の書物を繙く機会を持つことができたのは、全く氏のおかげである。一週間に一つずつ、經典を解説書と首っぴきで読んで、それを宗教欄に書いた。般若心経から華嚴経、浄土三部経、碧巖録、瑞巖録といったもの、あるいはまた歎異抄、教行信証など、やたらに読んだ。（後略）

以上の内容から、趙行徳が肅州の寺から經典を借りて読んだ場面は井上靖自身の経験を投影したことが推測される。宗教欄を担当して一年ほど経た頃、井上は美術批評を担当することを上司から命じられた。その後、井上は多くの仏教関係の展覧会を見た上、西域、あるいは仏教に関する作品を次々と発表する。

Ⅲ 朱王礼・尉遲光の人物像

本作は、井上自身が「歴史離れ」の作品であると述べているように、主要登場人物が井上の想像から生まれている。福田宏年氏の指摘¹⁷によれば、小説として、「虚無的な行動人の主人公」、「その主人公の憧憬の対象である美しい女性」、さらに、「狂言廻しの役として登場する特異な副人物」によって構成されるものであり、『敦煌』においては、「主人公」が趙行徳、「美しい女性」が回鶻王族の娘、「副人物」として、朱王礼と尉遲光が登場する。

さらに、福田氏は、「この狂言廻しの副人物がきわめて印象あざやかに描かれていることが多い」と述べている。朱王礼も尉遲光も、主人公の趙行徳より鮮やかに描かれていると言ってよいであろう。

趙行徳の人物像を一言で言うのは難しいが、朱王礼については、勇猛な生まれながらの軍人と言うことができるし、尉遲光については、商魂逞しい盗賊まがいの貿易商人ということができる。彼らは趙行徳のように、学問に打ち込んでいたかと思えば、戦時にあつては勇者ぶりを発揮するというような複雑な属性を持っている人間ではなく、極めて典型的な軍人であり、貿易商人である。そのため、かえって趙行徳よりも個性が強いように感じられる。

1. 朱王礼の人物像

①職業軍人

朱王礼が趙行徳に初めて会った時、彼は西夏軍の漢人部隊に属した軍人であった。官職は「兵卒百人の長」であった。

西夏軍の漢人部隊とは、戦争中西夏軍の捕虜になった漢人で組織されたものである。朱は元々靈州にいた宋の軍人であった。靈州が西夏に降った時、朱は西夏の捕虜となり、西夏の前軍に配せられていた。

彼は死ぬまで、身分は軍人であった。朱の生涯は三段階（宋の軍人、西夏の軍人、漢族の軍人）に分けられる。朱が西夏の捕虜となったことは、やむを得ないことだが、西夏を裏切って李元昊の首を狙ったのは、彼自身の判断である。朱は西夏軍の捕虜となったことをひどく恥じていた。もし、そのことに触れると「手のつけられないほど狂暴になる」のである。

一方で、朱王礼は職業軍人としての誇りを持っている。

（前略）俺の部隊は今までにいかなる場合でも戦いの駆引で敗けをとったことはない。

八分通りは討死するが、あとの生き残った者で必ず勝利を占める。（後略）

このような軍人の誇りを持っている朱は、自分が捕虜となったことに対して、劣等感情も持っていると考えられる。

福田宏年氏は「井上靖の劣等感情は、『敦煌』などの作品の核となって生き続けている。」

と述べている¹⁸。井上の劣等感情について、井上靖は「私の自己形成史」で、以下の二点を述べている¹⁹。

- 都会的なものに対する気後れ。
- 度重なる受験の失敗。

井上靖と朱王礼の劣等感情は、それぞれの個人差があるが、井上靖は自分の劣等感情を朱王礼に託していると考えられる。また、朱王礼が持っていた劣等感情は、西夏軍を裏切る原因の伏線ともなっている。

②朱王礼の「漢字碑」

西夏軍で安定した地位にあった朱王礼は、なぜ西夏軍を裏切ったのか。その原因は複雑であるが、主に漢人としての民族意識の覚醒にあるのではないだろうか。

朱王礼が謀反を起こした原因は以下の三点と考えられる。

- 漢人としての民族意識の覚醒。
- 回鶻王族の娘のための、李元昊への復讐。
- 捕虜にされたことによる、西夏軍への復讐。

朱王礼が謀反を起こした時、既に「兵卒三百の長」から西夏軍漢人部隊の五千人を統率する指揮官となっていた。しかし、西夏軍で「出世」した朱はそのまま西夏のため、死ぬまで戦うわけではない。謀反は、朱が長い時間をかけ、計画したものである。

「ばか！」と朱王礼は大声で呶鳴った。

「碑は無論、漢字で書くんだ。俺たちは西夏人じゃない。西夏の文字なんか、命令書を読む時にしか必要ないんだ」

朱は西夏軍の一員でありながら、漢人としての自分を忘れてはいなかった。朱の漢人部隊は、西夏軍の前軍として、実は漢人兵士たちの命で西夏軍の道を開くのである。

特に、西夏が吐蕃を攻略した時、朱は四千五百人の漢人部隊を率いて行ったが、瓜州に戻った時にはわずか一千人足らずの人数に減っていた。戦争中の西夏軍のやり方がいかなるものか、それまでの戦いで朱王礼自身も生き残りの部下の兵士たちもよく体験して来ている。青唐で西夏軍は何千人もの女子供を虐殺した。西夏軍の次の攻略対象は、漢人が住んでいる瓜沙地区である。

(前略) ばか！ 李元昊は曹氏一族を根こそぎ殺戮し、州人の男は悉く兵役に入れ、女は一人残らず奴婢にしてしまうだろう。(中略) 李元昊はそういう男なのだ。俺たちは同じ血を持った漢人のためにも、あいつをここでやっつけねばならぬ。

西夏軍の最初の戦いは、民族独立のためである。朱王礼は職業軍人として、自分は永遠に戦闘の勝利者であることを信じて、戦闘のために生きていた。

西夏軍に入れられた後、彼が攻略したのは回鶻、吐蕃など西域の少数民族の集落である。しかし、李元昊が西夏王になった後、西夏軍の攻略は徐々に侵略戦争に変わっていった。次に、李元昊が標的としたのは漢人集落である。ここに至って、青唐との戦いで多くの女子供の死を目撃した朱王礼の民族意識が覚醒した。

西夏軍に謀反を起こした朱王礼は、宋の将領でもなければ、曹氏政権の将軍でもない。その時の、朱の身分は漢族の軍人というにすぎない。かつて捕虜にされたことによる恨みと、回鶻王族の娘の死は、朱の心に火種を埋めた。この火種を爆発させたのは、朱王礼の民族意識の覚醒とこれまで蓄積された怒りである。

それまで朱王礼にとって女というものは男の欲望を満たすだけの存在でしかなかったが、回鶻王族の娘に対してだけは違っていた。女が死んだ時、朱王礼は自分の気持ちを趙行徳に告げた。

今だから言うが、俺はあの女が好きだった。いまでも好きだ。俺は女なんてものはただの道具だと思っていたんだ。だが、お前があの女を引き合わせたばかりに、俺は女に心を奪われてしまった。情けないことだが仕方がない。

この荒々しい軍人の心を奪ってしまう回鶻王族の娘は、作品中でも強く光輝き、男たちが惹かれずには入られない女神のような存在にもなっている。女の死は、趙行徳には永遠への情熱を与えたが、朱王礼には復讐の執念しか与えず、ついには彼を破滅に導いた。

朱王礼は最後の戦闘で戦死した。朱は漢字がほとんど読めないが、自分と自分のような戦闘で戦った人々のために、漢字の碑を立てて欲しいと願う。自分の民族のために戦死した彼らにとって、戦いはある意味で、平和を実現する唯一の方法である。

多民族が雑居している西域で、多くの漢人は故郷を離れて、国境で戦いを続けていた。夥しい兵士の骨は砂漠に埋葬された。朱のような人物は、どの民族にもいるだろう。「漢字碑」は戦死した人々を記念するものであるし、自分の民族のために戦った証拠でもある。結局、作品中で「漢字碑」が造られたかどうかは不明だが、井上靖は「朱王礼」という人物の創作を通して、「碑」を造ったと言えるだろう。

2. 尉遲光の人物像

①王族の後裔

尉遲光が初めて作品に登場するのは、第五章である。身分は商人であり、隊商の首領として、西域諸国を廻って、各民族の間で貿易を行っていた。尉遲は自分が于闐王族の後裔であると自称している。自分の母親は沙州の名家汜氏だと言い、母親の親父は沙州の鳴沙山に仏洞を幾つも開鑿していると述べている。

劉鋒晋氏の研究²⁰によると、沙州の汜氏は歴史上に確かに名家であり、于闐王族との政略結婚の実例も多くあった。さらに、莫高窟第九十八号窟の壁画によると、于闐の王族が仏洞を開鑿したということも歴史と一致している。

于闐国は、西域の歴史のなかで実在するが、尉遲光の名前は歴史書には見当たらない。消亡した王族の後裔という設定は、「藏経洞」を趙行徳に提供することの合理的な説明となる。また、彼は自分が于闐の王族の後裔だということを非常に誇りに思っており、そのことが彼の一切の行為を支配している。

尉遲王朝という、いまは地上から消え去った于闐の王族の家柄の持つ輝かしさは、彼を春時にしてどのようにも変貌させた。彼はそのためにはどのようなにも勇敢となることができたし、また冷酷になることもできた。砂漠で他の商隊を襲う時でさえも、彼の心の内部のどこかには、尉遲王族の誇りが一役買っているに違いなかった。彼は己が祖先の栄光と権勢にかけても、相手に一物も残さず根こそぎ奪り上げなければ気がすまぬようなところがあった。

尉遲は、自分は高貴な人間であり、自分には恐怖の対象となるものなど何一つない思い込んでいるので、危険な戦場の間を駆け廻るという勇敢な行為や、略奪者のような行為ができるのである。

②砂漠の強盗

本作品における三人の主要登場人物である趙行徳、朱王礼、尉遲光の中で、尉遲光は典型的な西域の人物であり、王族の後裔という誇りが彼に強烈な個性を与えている。

（前略）尉遲光は、金を儲けるためにはいかなる事をも辞さない男であった。彼の職業を名付ければ、さしずめ貿易商には違いなかったが、併しまた盗賊と呼んでも恐喝団と言っても、必ずしも言い過ぎとは言えなかった。（中略）この世に何一つ怖いというものを持っていない男に見えた。（後略）

尉遲光は、于闐人と漢人との両方の血を引いている。彼は王族の後裔として、現状に不満

を持っていた。かつての栄光を回復するため、彼はあちこち奔走して、西域の諸国と付き合い合っ、商売をして、不当な利益をむさぼった。彼は趙行徳を興慶まで連れて行った報酬として、朱王礼に二十人分の武器を要求し、瓜州太守の曹延惠から五十頭の駱駝をもらった。

井上は本作で尉遲光という欲張りな異民族の男を創作した。尉遲によって、經典などを隠す場所が提供された。さらに、尉遲の強盗のような性格によって、戦火が城内まで来る直前に、重要な交通手段である駱駝隊も確保された。

尉遲が積極的に趙行徳に協力したのは、駱駝に載っていたものが曹氏一族の財宝だと勘違いしたためである。この尉遲の貪欲は、「敦煌文書」を守ることに役立った。一方、彼の貪欲は、自分の死を招いた。さらに、趙行徳と尉遲光の二人の「成功と失敗」、あるいは「生と死」の対比には、「勸善懲惡」の思想も見られるだろう。

朱王礼は「碑」を作ろうと考えており、趙行徳にそれを書かせようとする。この行動は、趙行徳を歴史的大事業の舞台に送り出すという役割を果たしたと考えられる。また、尉遲光という、自分に対して絶対の自信を持っていた男が、一瞬にして破滅する場面を通して、人間が執着する財宝や権勢への欲望がいかにむなしいものであるかということが暗示されている。

朱王礼と尉遲光は、趙行徳と対照的な行動をとることによって、趙行徳のとった行動をより価値あるものにするという役割を担っていると言えるだろう。

IV 終わりに

井上靖が『敦煌』創作を構想し始めてから連載発表するまで、ほぼ二十年を経過した。「趙行徳」は、「敦煌文書」を誰が石窟に運んだのかという問いへの解答である。井上は敦煌学に関する膨大な資料、及び周りの人々の話から取材した以外に、自分の受験の経験、従軍の経験、職業の経験などを趙に投影した。主人公の趙行徳の人物像に関して、本稿では儒生、軍人、仏教徒の三段階に分類した。さらに、人物像の変化の原因と各段階のモデルについて、考察を行った。

朱王礼は「碑」を作ろうと考えており、趙行徳にそれを書かせようとする。この行動は、趙行徳を歴史的大事業の舞台に送り出すという役割を果たしたと考えられる。また、尉遲光という、自分に対して絶対の自信を持っていた男が、一瞬にして破滅する場面を通して、人間が執着する財宝や権勢への欲望がいかにむなしいものであるかということが暗示されている。

また、朱王礼と尉遲光は、趙行徳と対照的な行動をとることによって、趙行徳のとった行動をより価値あるものにするという役割を担っていると言える。

注

- 1 井上靖「自作「蒼き狼」について―大岡氏の「常識的文学論」を読んで」（『群像』一九六一年二月）
- 2 譚璋「井上靖中国歴史題材小説『敦煌』における中国像の研究」（湖南大学修士論文、二〇一〇年四月）
- 3 高木伸幸「井上靖文学における「学問」―「敦煌」試論―」（『別府大学国語国文学』第五十五巻、二〇一三年十二月）
- 4 鈴木正志「井上靖「敦煌」の世界―趙行徳と回鶻の王族の女とを中心に」（『新大國語』第十四号、一九八八年三月）、及び鈴木正志「井上靖『敦煌』の研究」（新潟大学国語科卒業論文、一九八八年二月）を参照した。
- 5 『敦煌』本文の引用は、総て『井上靖全集』第十二巻（新潮社、一九九六年四月）による。
- 6 注2に同じ。
- 7 科挙に関して、荒木敏一『宋代科挙制度研究』（同朋舎、一九六九年三月）、宮崎市定『科挙』（秋田屋、一九四五年十月）を参照した。
- 8 福田宏年『井上靖の世界』（講談社、一九七二年九月）
- 9 劉鋒晋「関与《敦煌》中涉及歴史的一些問題」（『成都師專學報』一九九三年第二期）
- 10 巖有禧『漱華隨筆』（廣文書局、一九六九年一月）、原文の傍線、「書き下し」と「現代語訳」は筆者がつけたものである。
- 11 井上靖「私の敦煌資料」（『歴史小説の周囲』講談社、一九七三年一月）
- 12 注8に同じ。
- 13 荒井寛方、日本画家。栃木県生。本名寛十郎。水野年方に入門し歴史画を学ぶ。大正五年、インドに渡り、アジャンタ壁画を模写、帰国後は仏教に多く画題を得た作品を発表する。また当麻寺天井画・竹生島弁天壁画の制作や法隆寺金堂壁画の模写事業にも参加した。（『コンサイス日本人名辞典〈第五版〉』（三省堂、二〇〇八年十二月）を参照。）
- 14 井上靖「私の自己形成史」（井上靖著、巖谷大四編『わが人生観』大和出版、一九六九年十二月）
- 15 大里恭三郎『井上靖と深沢七郎』（審美社、一九八四年九月）
- 16 注14に同じ。
- 17 注8に同じ。
- 18 福田宏年『増補 井上靖評伝覚』（集英社、一九九一年十月）
- 19 注14に同じ。
- 20 注9に同じ。

【付記】本稿は二〇一五年度日本近代文学会新潟支部研究会（十月十七日）における口頭発表を基にしたものである。有益なご教示を頂いた諸先生方に謝意を表したい。